

変わる第一歩

(原文)

中山 愛理 (14 歳)

広島県

広島なぎさ中学校

朝、学校に行く時に私は電車に乗る。毎日同じ時間で同じ車両。そして、私と同じ時間で同じ車両、同じイスに目の不自由な男性がいつも座っている。私とは降りる駅が違う。一番人が多く乗って来る駅でその男性は降りる。アナウンスでその駅の名前が呼ばれるとピクッと反応してバッグの中から折たたみ式の白杖を取り出して、まるで見えているかのように大勢の人々をぬって下車をする。私は毎日同じ光景を目にする。その男性が通るとき、その男性を迷惑といわんばかりに見つめる人達がいる。私はいつもそれを見て胸がキュッとしめつけられて、違う車両に乗ろうといつも思う。なぜ目の不自由な方をそんな冷たい目で見るのか、その男性は全く悪くないのにどうして大勢から避けられないといけないのか。私はその度にその冷たい心と、ただ見て何もできない私を変えたいと思った。

私がまだ2年生の時、「共に生きる」という授業があり、目や耳が不自由な方々の気持ちになってその人達のことを理解して、私達に何ができるか考えるという視点の授業があった。その授業で一番心に残ったことは、郡さんという耳の不自由な方の講話を聞くという授業だった。郡さんは女性の方で、今現在ほぼ毎日世界を飛びまわって様々な国の手話を英語、日本語などに訳し、国と国とを結ぶという素晴らしい仕事をしている。私はきっと、この大きな仕事に就くまでの人生の中で、耳が聞こえないということから逃げたかったこともあっただろうと思った。しかし、郡さんは、耳が聞こえないということ誇りに思っていて、むしろ耳が聞こえなくて良かったといっていた。私はとても驚いて、今まで耳や目が不自由な人に対して「かわいそう」などという言葉掛けていた自分が郡さんの誇りを「かわいそう」といっているようで、郡さんに申し訳ないと思った。郡さんだけではない。世界中の耳や目が不自由な人々に私はしばしば謝罪をした。また、私は郡さんから学んだことがある。郡さんの講話の題名は、「だから、大丈夫！！」という言葉だった。私はその言葉をこう解釈した。「どんなに不自由があっても大丈夫。心配しなくても勇気を持ってつながろうとすれば、どんな人でもつながってお互いを理解することができる」と。この解釈が、正解か不正解か分からない。でも、私は郡さんから学んだことは、そういうことなのではないかと思う。郡さんは私の心にぽっかりと空いた穴の中に、耳や目が不自由な人達に対する新しい考えを埋めて下さったような気がする。

最近よくみんなが口にする「平等」という言葉。平等、平等と連呼している人々の中には、前までの私と同じに目や耳が不自由な人に対して「かわいそう」という言葉で済ませて、一種の偏見を持ってい

る人がたくさんいる。そのような人々全てに郡さんの話を聞かせるのはとても無理がある。そこで、郡さんの話を聞いて変わった私が、どこか勘違いをしている人達に教えてあげたいことが数えきれないほどある。私達は同じだ。見た目が違って同じ地につき、同じ空を見て、同じ人間として生きている。そのようなことに気づいていない人を私は変えたい。一気に変わらなくてもいい。自分自身が行動を起こして、周りの人々に少しでも伝わって、次々にその人達が変わっていけばいいと私は思う。私はまだ中学生で少しの行動しかできない。でも、少しずつの行動から大きな変化が起きれば大成功といえるだろう。一つ考えているのが、どこか不自由のある人でも安心して乗れる電車の車両を作れば、よりよく生活できるのではないかと思う。

朝、同じ時間で同じ車両。いつもの光景だった。あの目の不自由な男性が、人が詰まって降りられない状態になっていた。私は周りに「降ります」と言って男性をホームまで誘導した。すると男性は笑顔で「ありがとう」と言った。私はこれが変わる第一歩だと感じた。